



近未来のハイブリッド地域医療 ～高度先進地域医療への挑戦～

江別市立病院・病院事業管理者(CEO)／旭川医科大学名誉教授
はせべなおゆき
長谷部直幸

はじめに

江別市立病院は、現在経営再建計画の真っ直中にあります。ご存知の如く、過去には内科医師の総辞職（平成18年）や総合診療内科医師の大量退職（平成28年～）などで幾度か全国的にも話題になりました。令和4年4月から地方公営企業法の全部適用に移行しております。当初、初代の病院事業管理者への就任のお話をいただいた時には、多額の累積赤字を前に、到底私などが手を出すべき職ではないと固辞しました。しかし各所から説得・懇願をいただき、「火中の栗」とか「貧乏くじ」とか評されながらの着任でしたが、直後から私のやる気は完全に火が点けられたままです。この1年間、「元気になる組織作り」の私の呼び掛けに呼応してくれる意欲溢れた職員に恵まれ、様々な改革プロジェクトを実行しながら、最大のネガティブ要因であった117億円の累積赤字の解消に成功し、経営再建は着実に進んでおります。収支の改善、収益の増加は無論重要な目標ですが、目指すべき医療を見失っては本末転倒です。最大の問題である医師不足、特に深刻な内科医不足の中でも江別市唯一の公立病院として、コロナ禍対応をはじめ政策医療の責務を果たしつつ、通常診療を維持するために全職員の力が結集されております。しかしそれだけでは単なる現状維持に過ぎません。コロナ後の近未来の医療として、私たちでなければ成し得ない医療を目指そうと呼び掛けております。それが「高度先進地域医療」です。

ハイブリッド医療としての「高度先進地域医療」

僭越ながら「高度先進地域医療」は私の造語です。近未来に目指すべき地域医療のあり方として数年来提唱している概念で、最近の日本医事新報（令和5年4月15日発行）¹⁾でも解説させていただきました。かつて「高度先進医療」と「地域医療」は相反する両極の概念のように捉えられておりましたが、AIとIoTの進歩は、今や先進医療こそ地域医療のためにあると言わなければならない状況を生み出しています。しかしそれは決して、DX全盛の波にのまれるAI偏重のマ

ニユアル・デジタル医療を指すものではありません。理想的な「高度先進地域医療」の姿とは、先進のデジタル要素と同時に究極のアナログ要素を併せ持つ近未来のハイブリッド医療を指します（図1）¹⁾。すなわち「高度先進地域医療」は、「制度としての高度先進医療」や「医療技術としての先進医療」を単に地域に導入することを意味する用語ではなく、地域で生み出し地域で育てる文字どおり高度かつ先進的な医療の姿を表わす概念です。

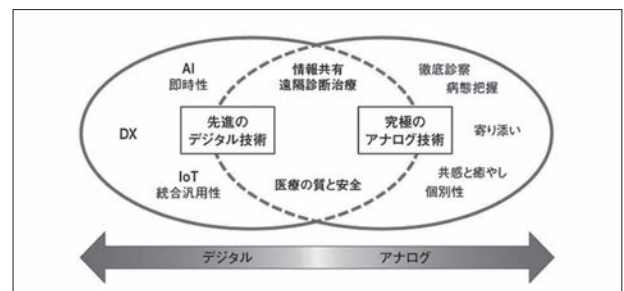


図1 高度先進地域医療（文献1）

「高度先進地域医療」におけるデジタル技術

地域の救急医療の現場では、心電図や画像などの患者情報を瞬時に遠隔地点の医療者と共有し、時を移さず適切な医療を適用する判断がなされつつあります。同時にその後の展開をリアルタイムに制御することも可能なデジタル技術が、すでに不可欠な連携技術として捉えられております。医師不足の医療現場でこそ、デジタル技術によって補完される領域は増えます。都市部で医師の働き方改革の一助として捉えられる他職種医療者へのタスクシフトは、地域ではより本質的な意味を持ちます。手技内容や技術によっては、AIを担い手とするタスクシフトがより積極的に導入されなければなりません。人的資源が十分ではない医療環境においてこそ、AIの学習能力や分析能力、さらにはデジタル技術の管理・統合・識別能力が「医療の質と安全」を担保する上で不可欠な要素となります。一部で問題提起されているChatGPTも、良識をもって適正に運用すれば大きな省力化・効率化の一助となり、まさにAIとの共働を図る医療環境が創出されるものと思います。

遠隔医療はデジタル技術の進歩とともに発展してきました。AIとIoTの進歩による先進技術が地域医療にこそ不可欠とされるのは遠隔医療がその典型と考えます。究極的な遠隔医療の進歩は、文字どおり遠く離れた複数地点を結ぶ遠隔操作による高度の医療を可能にします。地方の医療機関の手術室・カテ室の患者の治療を、数百km離れた遠隔地の医師がモニター下に行う遠隔ロボット手術やカテーテル治療が日常のものとなる時代が来ています。人手不足の地域医療の現場においてこそ高度な先進のデジタル医療技術が必要なのです。

「高度先進地域医療」におけるアナログ技術

2045年には完璧なAIが医療の世界を席卷すると言われています。AIが人間に取って代わるかもしれない近未来にこそ、我々医療人に求められるのは「原点回帰」の姿勢であると思います。それは徹底的に人に寄り添うアナログの精神です。地域医療に限らず、人に寄り添い、頭从天辺から足の先まで医療者の手で診てあげることこそが、人間よりもAIと言われる時代に求められる「原点回帰」の医療の姿であると信じます。TEDをご存知の方は多いと思いますが、Abraham Vergheseの「A doctor's touch」²⁾は、この考えを代弁してくれるトークであり、200万回再生に迫る名講演のひとつです。私は、患者さんの全身の理学所見を把握することを自らの誇りとして医療に携わり、その基本姿勢を医学生・研修医に教育してまいりました。自らの手の温もりをもって行う触診・打診・聴診で得られる医学情報やその過程で築かれる患者さんとの信頼関係は、AIには越えられないものとの自負があります。何より患者に寄り添い、患者の話を聞き、共感し、それによって癒やしてあげられるのは、AIロボットより我々人間の方が得意でありたいと願います。それが唯一の道であった「赤ひげ」時代の地域医療の究極のアナログの精神こそ、DX全盛時代の医療に決して忘れてはならない要素であると思います。逆に申し上げれば、地域医療においてこそアナログの技術が磨かれ、それを誇ることのできる機会に恵まれるとも言えます。

江別市立病院における「高度先進地域医療」への挑戦

江別市立病院における最重要課題のひとつは医師不足です。冒頭述べましたように歴史的にも内科医・総合内科医数の激変が目された病院ですが、現状の課題もそこにあります。経営再建を進めるに当たり、市職員の給与削減を原資とする基金を託していただきました。大変重い浄財であるこの資金を「未来医療創造基金」と名付け、有効活用の方策を「未来のタネ」と称して全職員から募集しました。様々なプロジェクトが提案され実行されましたが、やはり医師確保と医療の充実が大きな課題として認識されました。一朝一夕には達成できない課題ですが、突破口のひとつは目指すべき医療の形を提示することと考えました。丁度市議会の一般質問でも、病院事業管理者（私）の地域医療に対する考えを述べるようご質問をいただき答弁させていただきましたが、その考え方が「高度先進地域医療」です。

(1) デジタル的側面

幸いなことに従来からご支援いただいて来た各医育大学のご理解とご協力をいただき、新年度の4月から先進医療の共同研究を担う二つの特設講座を開設することができました。一つは、北海道大学呼吸器内科学教室（今野哲教授）との間で、呼吸器・循

環器疾患の未病状態での早期検出やウェアラブルデバイスの開発を目指す「呼吸・循環未来医療創発講座」です。画像診断・生理機能診断のみならず、新規バイオマーカーの確立や新たなモニタリングシステムの構築にむけて、地元企業にも参画をいただいて始動しております。さらに札幌医科大学消化器内科学講座（仲瀬裕志教授）との間で、消化器内視鏡によるデジタル遠隔医療のモデル構築を目指す「消化器先端内視鏡学講座」が始動しました。本年「冬のDigi田甲子園」で仲瀬教授が内閣総理大臣表彰を受けた内視鏡デジタル遠隔診療構想の実装と併せ、内視鏡医師・技術の育成と消化器疾患の新規治療法の開発をめざすものです。この4月から、これらの講座に所属する先生たちが当院で臨床研究活動を開始しております。

さらに、近隣の当別町・南幌町・新篠津村の各町村にお声掛けをして協定を結び「江別・南空知先端医療推進協議会」を組織いたしました。各自治体の熱い期待をいただきながら、この協議会を軸として、我々が抱える16万人の地域医療圏において「高度先進地域医療」を展開する基盤が構築されつつあります。

(2) アナログ的側面

「元気が出る組織」の基本は心が通うことと信じ、対話を必須として常にその先への心配りを意識しております。就任後間もなく、退職者への辞令交付で「本職を免ずる」との一行の官公庁の辞令に我慢がならず、別途「感謝とお別れの言葉」の書状を差し上げ、再び共に働くことへの期待感も伝えるようにしました。

江別市立病院でも初期臨床研修医を受け入れております。内科医不足のため私自身も内科・循環器内科の診療に当たっておりますが、コロナ禍の制約はあるものの、大学以来私が実践してきた全身を診る理学所見の取り方と、患者さんの話を聞き患者さんの分かる言葉で納得してもらえるまで説明を尽くす究極のアナログ診療に付き合ってもらっております。大学時代に私のトレードマークだった10人同時に指導できるワイヤレス聴診器は装備しておりませんが、聴診をはじめとしてより個別に頭从天辺から足の先までの診察技術を指導しております。手前味噌ですが研修医からの評判は上々で、外来患者さんに「こんなに丁寧に診てもらって、こんなに詳しく説明してもらって、本当にありがとうございます」と感謝していただき、受診したことに納得して帰っていただける体験を共有するのは意義あることと思います。

院内のアナログ姿勢を尊重する風土の醸成を期待して、今年の年頭訓示では二つの運動を提唱いたしました。「おはようとおりの響き合う病院を目指そう」との運動は、相手を尊重して今一度挨拶を徹底し、風通しを良くして院内コミュニケーション

ンを活性化するものです。いま一つは「ひとりひとりが想像力を磨き、自らの行動で最高の病院を目指そう」との運動です。具体的には「患者さんが困っている」「ご家族が怒っている」など様々な場面で、職員1人1人が、まずは自分が病院を代表しているとの意識を強く持ちながら、自分の一言で、あるいは自分の対応で「江別市立病院を最高の病院と言わせてみせる」という気概を持って対応しようとの運動です。掛け声のみに終わらぬよう、実践に秀でた職員を見出して表彰して、皆で見習う習慣を呼び掛けました。

経営改革と言いながら、地域中核病院としては十分と言えないことばかりです。医師不足、特に常勤内科医の不足はまだまだ深刻です。高度先進と言いつつながらダビンチも有りません。PET-CTも有りません。「あれが無いからできない」「これが駄目だからできない」と、それはその通りですが、だからこそ皆で「ほんの少しの工夫」を持ち寄って欲しいとお願いしております。「ほんの少しの思いやり」も持ち寄って欲しいと申しております。少しの工夫と思いやりが有れば、目の前の困難は必ず乗り越えられると思います。究極のアナログの精神は、信じる力を与えてくれます。

未だ緒に就いたばかりではありますが、高度のデジタル技術と究極のアナログ技術のハイブリッド医療である「高度先進地域医療」を、江別市立病院でなければ成し得ない医療として、あるいは全国に先駆けて江別市立病院が目指す医療として育てて行くことができると願っております。

「高度先進地域医療」に期待される近未来（図2）

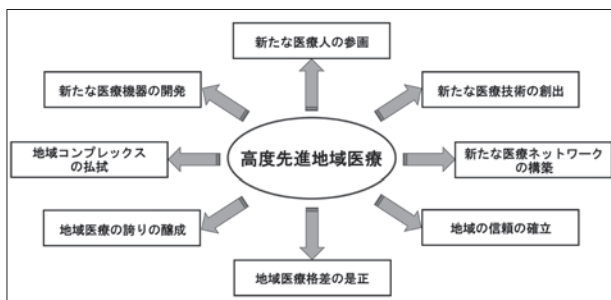


図2 高度先進地域医療の付加価値と期待される波及効果

「高度先進地域医療」を推進することにより、新たな医療技術の創出・医療機器の開発が刺激され、新規のネットワークが生まれ、まさに「高度先進地域医療イノベーション」と呼ぶべき展開も夢ではないと思います。また「地域医療」という言葉に負のイメージを抱く若い医療者は少なくありませんが、「高度先進地域医療」の概念を掲げて実践することが、地域医療・僻地医療に携わる医療者の謂われ無きコンプレックスを払拭し、誇りを持って地域医療に従事する拠り所にもなればと願うものです。「高度先進地域医療」の概念が、積極的に地域で活躍しようとする新たな医療人を生み出す契機になることを期待します。

さらに「高度先進地域医療」は、地域と都市部の医療格差の解消をはかるスローガンとしても機能する用語です。地域のデジタル環境を整え、先進性を追求することで都市部との医療格差の解消を目指すものですが、さらに進んでアナログ技術を究めその精神を研ぎ澄ますことによって、地域と都市部の医療格差はむしろ逆転させることさえ期待できます。地域の医療機関が「高度先進地域医療」を推進する医療機関として、そのステータスをアピールすることが地域の信頼をさらに確かなものとする、そうした未来を夢見て私たちの挑戦は続きます。

参考文献

- 1) 長谷部直幸:「高度先進地域医療」という考え方: 近未来のハイブリッド地域医療。日本医事新報 No5164, 2023, 4, 15
- 2) Abraham Verghese : A doctor's touch, (https://www.ted.com/talks/abraham_verghese_a_doctor_s_touch)



みんなで乗れば、
未来が変わる。

考えよう。行動しよう。公共交通の未来。

北海道医師会は、北海道鉄道活性化協議会（会長：北海道知事）の構成団体として、JR北海道をはじめとする公共交通機関の利用促進に協力しています。

会員の皆さまにも是非ご支援を賜りますようお願いいたします。

公式 Web サイト <https://www.hokkaido-rail-k.jp/>